

町長が語る
一宮の歴史

加納家と歩んだ、 発展の歴史

近世期一宮町に關してもうひとつ大きなトピックは、一宮藩の藩政に關する事柄です。加納家は、もと三河の土豪でしたが、江戸時代前期は紀伊徳川家の家中にあり、吉宗の將軍就任とともに大名となったものです。石高は最大で一萬三千石、小大名でしたが、若年寄として幕政に参加する家柄として遇されていました。

一宮本郷村と新箕村が一宮藩の領地でしたが、当初の陣屋は伊勢の八田（三重県四日市市）に置かれていました。江戸時代後期の文政9年（1826）に加納久徳が陣屋を一宮に建てて藩庁を移し、武士が居住するようになりました。これは日本周辺に出現する外国船が増えたことから、九十九里南端の一宮を江戸防衛の拠点としようとしたためではないかと考えられます。

一宮藩は、新田の開発につとめるとともに、灌漑設備の整備など、米作農業の振興につとめました。当時は米が年貢の中心ですから、当然の政策といえます。中でも、加納久徴（1813〜1864）は、天保年間に一宮南部の山中に造られていた灌漑用のため池を拡

張し、「洞庭湖」と名づけました。「洞庭湖」とは中国湖南省の大湖で、「呉蘇東南に圻け、乾坤日夜浮かぶ」（呉と楚の地方がそれによって東南に引き裂かれ、天地が日夜その上に浮かんでいる…杜甫の「岳陽楼に登る」より）といわれる広大な湖です。久徴は、このあたりの「洞」という地名に因み、この堰が満々として水を湛えることを期待したのでしよう。周囲には桜の木を植え、「洞庭」の碑を建てました（1844）。桜の木は後に植え継がれて、昭和の時代まで桜の名所として多くの人出で賑わいました。また、このため池からの灌漑用水路として、1748年以降「市平衛堀」が掘られて、1966年に閉じられるまで、一宮の水田に水を運びました。

加納久徴は、外国船打ち払いのために、1844年、海岸に5台の砲台を築きました。また、農民や商人まで徴用して部隊を編成し、高杉晋作の奇兵隊に類して洋式兵法を取り入れたといわれます。若年寄として皇女和宮の徳川家茂への降嫁の警護役を果たしました。また、高藤山城址にある上総広常を記念する石碑を建てたのも彼でした。久徴は、大変優れた経営の才を持つ領主でした。

久徴の時から藩の学問所が開かれ、最後の藩主加納久宜の時代には崇文館という学校が置かれたといえます。現在の一宮小学校にある「崇文門」は、これに因んだ名称です。民間の文化活動とあいまって、一宮の文化水準を上げる役割を果たし、公立学校の源流となりました。

